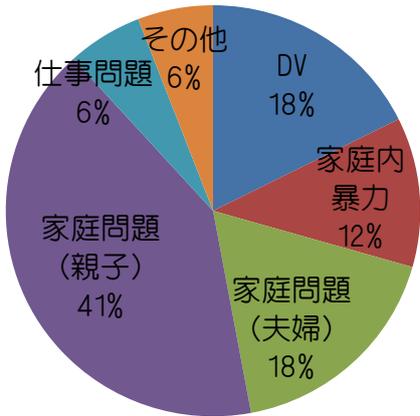


【2月の相談レポート】

2月は仙台支部から



↑ 図1. 2月に寄せられた相談案件割合 (仙台支部)

図2. 読売新聞 (2013年3月6日) →

手探りの子育て
大震災2年

宮城県仙台市内の仮設住宅。平屋建ての4戸建て、男性(37)は、妻33、2歳児の長男(3)の3人で暮らす。広さは国の標準である29.7平方メートル。一室は茶の間として広く利用されている。二室はリビングに使用されている。三室はキッチンとトイレ、洗面所を兼ねて使われている。四室は寝室として使われている。仮設住宅の生活は、手探りの子育てが続いている。震災当日、津波に飲み込まれていく人々を目の当たりにし、いま現在も眠れない日々が続いている、という相談。

隣から文句も…遊び場必要

仮設住宅の集会所を利用した遊び場で、はしゃぐ子どもたち(宮城県石巻市)

明治大学建築学科教授の山本浩二さんの研究によると、仮設住宅の生活は、手探りの子育てが続いている。震災当日、津波に飲み込まれていく人々を目の当たりにし、いま現在も眠れない日々が続いている、という相談。

復興住宅 進まない建設

厚生労働省によると、仮設住宅の入居戸数は2月25日現在、岩手、宮城、福島は3県で約4万7900戸。復興は原則2年だが、国は昨年、1年延長を決め、さらに2014年度末まで、1年延長することを検討している。自宅が全壊、半壊し自力再建できない仮設住宅の入居者には、災害公営住宅(復興住宅)に移ることを希望する人が多い。復興住宅の広さは、岩手県では3人以上で65平方メートルが標準となっているなど、仮設住宅の29.7平方メートルより余裕がある。しかし復興住宅の建設も進んでいない。計画では岩手約5500戸、宮城約1万5000戸、福島約2800戸だが、完成したのは岩手、福島の約60戸だ。

仙台支部には、歌舞伎町の駆け込み寺と同様、DV、家庭内暴力、引きこもり、家族問題などの相談案件が多数寄せられています。それらの問題の中には、東日本大震災が直接的・間接的な原因となっているものがあります。それが仙台支部の特色です。

被災地からの相談に注目してみましょう。仮設住宅でのストレスがDVや家庭内暴力を引き起こしてしまった、という相談。原発の放射能に対する(夫婦間の)危機意識のずれ違いから「離婚と引っ越しを考えている」という女性からの相談。震災当日、津波に飲み込まれていく人々を目の当たりにし、いま現在も眠れない日々が続いている、という相談。

被災地を訪れた人からの相談もあります。東京で仕事を探していたある男性は、人材派遣業者に「被災地に解体工事の仕事がある」と誘われて被災地へ。しかし、住宅の準備などにかかる手数料として業者に預けていた大金を騙し盗られてしまいました。所持金も住むところもない。その男性は仙台支部に駆け込んできました。

震災がきっかけとなって発生したととらえることのできる生活トラブルや心の問題。それらは震災の二次被害であり、そこで必要とされることの多い仙台支部は「二次被害の駆け込み寺」ともいえます。被災者および被災地でトラブルを抱えてしまった人々を支援し続けること、それが仙台支部の重要な役割のひとつです。

悩み事や困り事があったら公益社団法人日本駆け込み寺へ。ご相談は、以下の電話番号からどうぞ。

- ◆新宿歌舞伎町駆け込み寺：03-5291-5720
- ◆仙台国分町駆け込み寺：022-395-7740